新潮文庫

青銅の基督（キリスト）

長與善郎著

新潮社

新潮文庫

青銅の基督

長與善郎著

新潮社版

76

青銅の基督

―一名南蠻鑄物師の死―

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

一

父秀忠と祖父家康の素志を繼いで、一つにはまだ德川の天下が織田や豐臣のやうに榮枯盛衰の例に洩れず、一時的で、三代目あたりからそろ〳〵くづれ出すのではないかと云ふ諸侯の肝を冷やす爲めに、又自分自らも內心實はその危險を少からず感じてゐた處から、さし當り切支丹を鎗玉に擧げて、凡そ殘虐の限りを盡した家光が死んで家綱が四代將軍となつてゐた頃の事である。

實際、無抵抗な切支丹は、所謂柔剛その宜しきを得て、齡に似合はずパキ〳〵と英明振りを發揮して、早くも「明君」と云はれた家光が、一方「國是に合はぬ」事は何處迄も嚴酷に懲罰して假借する處がないと云ふ「恐ろしさ」を諸侯に示すには得易からざる無難な好材料であつた。「何と云つてもまだあの靑二才で」と高を括つて見てゐるらしく思はれた諸侯達を、就職のとつ始めから度膽を拔いてくれようと思つてゐた若將軍の切支丹に對する處置の酷烈さと、その詮索し方の凄まじい周到さとはたしかに「あはよくば又頭を擡げる時機も」と思つてゐた諸侯の心事を脅し、その野望を斷念せしめて行くには效き目は著しかつた。奧羽きつての勢力家で、小心で、大の野心家であつた伊達政宗さへ、此年少氣銳な三代將軍の承職に當つて江戶に上つた際、五十人の切支丹の首が鈴ケ森で刎ねられるのを眼のあたり見て、その耶蘇敎に對する態度をガラリと變

へた程であつた。

かくて何でもかんでも德川の基礎を萬代に固める事が自家一代の使命であると心得てゐた家光は諸侯と直接刄を交へて壓迫するやうなまづい手段に依らずに、諸侯がとも角も同意しない譯に行かぬ理由と名義の下に、此日本の神を否定し、佛を否定し、國法を無視し、羊のやうな柔和な顏をして、其實國土侵略の目的を腹に持つてゐる狼の群を屠殺しにする事に依つて、間接に德川の威勢を天下に示し、同時に自分の反照を眼のあたり見る事が出來る事を此上もなく面白がり、喜んだ。何となく氣味のわるかつた姻戚の伊達政宗迄が思ひがけない奧羽での切支丹迫害の報告書を奉つた時、彼は自分がもうそれ程迄におそれられてゐるのかと云ふ得意の爲めに、まだどこか子供〻〻した俤のぬけきらぬ顏を赭くし、パタ〳〵とその書面を叩き乍らそれを奧方に見せに座を蹴つて立つた程であつた。

併し切支丹が神の道と救ひの教へを說くと稱して實は日本侵略が目的であると云ふ事は只彼の構へた口實ではなかつた。實際彼はさう信じてゐたので、それは又その筈であつた。朝廷に最も勢力のあつた神道主義者と佛僧との耶蘇教に對するあらゆる反對讒訴姑息な陰謀は秀吉時代からの古い事であつたが、まだその他に商業上の利害の反目からフランシスコ・ザヱリオ以來日本の貿易と布教とを一手に占めてゐた葡萄牙人を陷れようとして、元來西班牙の廣大な領土は宣教師（ばてれん）を手先に使つて侵略したものだと實しやかに述べ立てる西班牙人があり、又家康の時には更に西

班牙と葡萄牙とを商敵とする新教國の和蘭人が現はれて家康の前に世界地圖をひろげ、耶蘇教國の君主すら宣教師を危險視して國外に放逐してゐる位であるなぞと云つて眼の前で十字架をへし折り、聖母の畫像を踏みつけて見せた事もあつた。のみならず捕獲した葡萄牙の商船から發見したものだと稱して僞造の密書――所謂「和蘭の御忠節」を勿體らしく捧呈したりしたのである。

さなきだに切支丹には誤解される點が實に多かつた。罪を犯して悔い悲しむ者は、罪を犯さぬつもりでゐる過ちのない傲慢な者より救はれ易いと云ふ意味が罪その物を肯定する教と見做された事も當然な事であつたが、又靈魂の救はれる事の爲めに肉體の死苦を甘んじると云ふ事がやがて死の讃美に思はれ、そしてその死に民衆を「嗾かす」ばてれん達は又國民を亡ぼして行く者と見做された事なぞも凡て尤もな事には相違なかつた。

且つ慶長の初めには疫病が流行り、天變地異がつゞいた。こんな事を佛僧や神官が神佛の怒りとして持ち出さずにはおく譯はなかつた。秀吉はそれには耳を藉さなかつたが、切支丹の一婦人に懸想してその婦人を妾にする事が出來なかつた時、始めて本當に切支丹を憎いと思つた。彼はその女を裸にして竹槍で突き殺させた後で、今日吾々が子供の時から耳にタコが出來るほど學校で聞かされた常套語の元祖を放つた。

「外國の土に善く適ふからと云つてその木をすぐ日本へ持つて來て植ゑると云ふ事は間違つてゐる。日本には日本の櫻がある。」

そして自ら朝鮮を侵略して行つた此猿英雄は一度でそれが懲らし得るつもりで、先づ廿六人の「侵略者」を長崎の立山で磔刑にし、虐殺の先鞭をつけた。

家康は秀吉よりも一層切支丹を最初から嫌つてゐた。徳川の運命と同じく、切支丹の運命にとつて致命的であつた關ケ原の決戰が濟み、切支丹の最も有力な擁護者であつた石田三成、小西行長、黑田孝高等が滅び失せて後は元和八年の五十五人虐殺を筆頭に露骨に切支丹迫害が始められた。かくてそれ迄は自ら洗禮をうけ、或は切支丹に厚意を持つてゐた西國の諸侯は幕府の嫌疑を怖れるが故に改宗し、切支丹の討伐にかゝつた。そして爾後切支丹の根絕やしは徳川家代々の方針となつた。

寛永十五年正月、島原の亂が片付き、續いて南蠻鎖國令が出て後、天文十八年以來百餘年の長きに亙り、二千人以上の殉教者と三萬數千人の被刑者とを出して尙執ねく餘炎をあげてゐた切支丹騷動なるものは一段落ついた樣に見えた。

「一つ時はほんに日本全國上下を擧げて靡いた位えらい勢ひぢやつたもんぢや。信長が本能寺で討たれた頃にや三十萬からの生粹の信者がをつた相な。それが此通り消え細る迄にやお上の仕打ちも隨分と思ひ切つて酷ごいには酷ごかつたが、片つ方も、亦執つこいとも執つこいもんぢやつた。かかうなつて見れや此れや此國に切支丹が容れられなかつたと云ふなあ、夫が結局天主（でうす）の御所存ぢやつたのかも知れんてな。」

こんな疑念がひそかに切支丹に厚意を持つ人々の念頭にもきざしかけてゐたその頃の事である。それでもなほ全國市町の要所々々には

定

きりしたん宗門は累年御禁制たり、自然不審なるもの有之者申出づべし、御褒美として

ばてれんの訴人　銀三百枚
いるまんの訴人　銀二百枚
立ちかへり者の訴人　同斷
宗門の訴人　銀百枚

同宿並にかくし置き他より顯はるゝに於ては其處の名主並びに五人組まで一類共可處嚴科也、仍下知如件

奉行

と認めた檜の高札がいかめしく樹てられてゐた頃の事である。

長崎の古川町に萩原裕佐と云ふ南蠻鑄物師がゐた。

二

「おい。お佐和。此間のあの『虎』をどこへやつたんだ。」

「よくもかう珍なものを集めたものだ」とつい人がをかしくなるほど煤ぼけた珍品古什の類を處狭く散らかした六疊の室の中を孫四郎は易者然たる鼈甲の眼鏡をかけて積んである繪本を跨ぎ、茶盆を跨ぎして先刻から机の上、床の間、押し入れの中と頻りに引つくり返して何か探してゐたが、かう荒々しく聲をかけた。

「ぬしは又賣つちまつたんだらうが。え？　俺にかくして。」

孫四郎の調子にはもうやゝ、刺があつた。その刺にさゝれて、隣りの四疊で針仕事をしてゐた細君はやぶれた襖をあけた。

「まあ、『又』なんて誰がいつそんな事をしましたらうか。」

やゝ上氣した頰の赭味のために剃つた眉のあとが殊に蒼く見える細君はかう云ひ乍ら羞ぢらひげに微笑んだ會釋を客の裕佐の方へなげ、「まあ、此散らかし方！　まるで屑屋さんのやうですわ。」と尻上りの調で云つて一寸突つ立つた。

「貴様、探して見い、ありやせん。」

孫四郎は邪慳にかう云ひ捨てゝ敷けば却つて冷た相な板のやうに重い座蒲團をドサリとわきへ放りなげ、長煙管の雁首で、鐵に銀の象嵌をした朝鮮の煙草箱を引き寄せ乍らその長い膝をグッと突き出して坐つた。

「それやこんなものよりやずつと傑作ぢや。此間の緣日の虎を早速やつて見たんぢやがな。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

彼はかう云つてひよろ長い體の居ずまひを直し、裕佐が緣近く持ち出して胡坐をかいて見てゐた一枚の繪を煙管でさした。それは山田長政が象に乘つて暹羅の國王の處に婿入をする圖で、版畫にする原畫であつた。

「ほうら。ありましたがな、こんな處に。矢つ張り貴郎が御自分でお藏ひになつたんですわ。」

細君は嬉しさの餘り長い白い脛を一寸あらはして、束になつてくづれてゐる錦繪を跨ぎ、安心と怨めしさとが一緒になつて堅くなつた表情を向け乍ら一枚の繪を夫に渡した。そして「いつだつてかうなんですの。」とやゝとげ〳〵しく云つて、そのとげ〳〵しさに自ら上氣した顏を更にぽつと赭らめ乍ら裕佐に笑顏を見せ、チラリと又夫を顧みて、次ぎの間へ去つた。

「あつたか。」孫四郎はうけ取り乍ら一言かう言つて、大事さうにフッと一息かけ、

「こゝへ來て御覽。こゝの方がまだ明るい。」

と云ひ乍らその繪をサラリと敷居の上へなげ、飲み殘しの冷たい茶をゴクリと一息に呑むと今度は眼鏡の球を袖口でこすり乍ら下から覗き込むやうにじろり〳〵と裕佐の顏を視入るのだつた。

諏訪神社の緣日に虎の見世物が出て非常な人氣を博した事はついその十日程前の事であつた。孫四郎の繪ではその虎の檻が街頭に引き出されてゐる。「朝鮮大虎」「大入々々」「大人一文小兒半文」と書いた札を背にして切りに客を呼んでゐる男が一方にゐる。かと思ふと張り子のやうな

虎が檻一杯に突つ立つていかめしく睨んでゐるその檻の前には「おらんだ人」と肩書きのある紅毛碧眼の異國人が蝙蝠傘をさした日本の遊女と腕を組んで、悠長にそれを見物してゐる。ステッキをついて猩々のやうに髯を生やした馬鹿に鼻の高い「おろしや人」が虎よりは見物人の方を見乍ら長閑にパイプを喫かしてゐる。大小をさした丁髷の侍のわきには日本の子供と中國の子供とが遊んでゐる。――

「ふむ。――」裕佐は思はずその繪のユーモアに微笑まされた。「なるほどこれや面白い。」

「近來の傑作ぢやらうがな。へッへ。」

むしろ好んで皮肉を銜ふやうなその歪んだ口許に深い皺を寄せ乍らにや〳〵と傲りがに裕佐の顏を見てゐた孫四郎はかう云つて高く笑ひ出した。

「傑作ですね。版にしたら又一しほ面白いでせう。」

その笑ひ聲の下品さに嫌氣を感じ乍らも裕佐はかうほめざるを得なかつた。「あの虎は君が畫くと面白からうと僕も思つてゐたんです。」

「へ、へ。中〻見逃しやせぬよ。」

と孫四郎は又雁首に煙草をつめながら、

「往來にさらしてある見世物に『大入』はをかしいが、そこがかう云ふ愛嬌ぢやでな。」かう云つて又笑つた。たしかに齡よりは十位老けて見えるがその實漸く四十になつた許りの此繪師は當時

長崎きつての唯一の版畫師であつた。

實の處裕佐は口に出してほめた上に内心感服――むしろ驚いてゐたのであつた。「實際變な奴だ」と彼は思ふのだつた。人間としては猶ほ更の事、畫家としての孫四郎にも彼は決して飽き足りてはゐなかつた。孫四郎は趣味のみに生き、自分は趣味のみに生きる事は出來ない。趣味のみに生き得る孫四郎の趣味はどうしても偏頗で局部的であり深みがない。自分はよし趣味によつて繪筆を執り、鑿を把る事があるとも、その趣味はいつしか消えて見えなくなり、それに代つて全身の心が現はれ、直ちに萬人の心をピタリと打つ底の生ける魂が儼として作品を支配しきる處迄行かなくては氣がすめない。

孫四郎の畫くものが現に面白い事は否定出來なかつた。唯「面白い」と云ふ丈けにすぎぬ藝術は所詮二流以上のものではあり得ないと裕佐は思つてゐた。併しその一流の境を求める自分はまだその俤の窺はれる仕事すらしてをらぬのに、孫四郎はとも角その「面白い」自家の一道を既に摑まへてゐる。「山田長政」や「虎」の繪にはその「摑んだ」と云ふ感じが顯著に出てゐる。そして彼はその狹い道の上で傍眼もふらずにめき〳〵と進みつゝある。孫四郎の到底了解し能はぬ底の傑作にも廣く共鳴を感じ得る自分は、まだその廣汎な理解と燃えたぎる深い内心の欲求とを寸分も生かして居らぬのに孫四郎はとも角その卑俗な趣味の偏狹に徹底して、それを自家の製作の上に生かし、悠々自適してゐる。かくて裕佐はその先輩に飽き足らぬ乍らも一方羨ましく思ひ、

その「面白さ」さへもない自己の仕事を顧みて淋しく感ぜずにはゐられなかつた。

「どうも僕は少しいろんなものに引かれすぎるのかな。」

裕佐は思はずかう嘆息を洩らして破れ芭蕉の亂れてゐる三坪ばかりの庭の方を向いた。

「いろんなものに引かれるのは結構ぢやないか。つまりそれ丈け、おぬしは眼があるのだからな。」

さう出られゝば「勿論」と裕佐は云ひ度くなるのだつた。しかし自分の裡にはたしかに孫四郎なぞの窺ひも得ぬ何かがあると自信してはゐるものゝまだその現の證據を實現した譯ではない。實現して眼のあたり見た上でない以上矢張り內心不安であり、空虛である。畢竟誰にでもある單なる自惚れ、架空の幻影ではないかと疑ふ。自分で疑ふ位なら人が見縊る事に文句は云へない。

「とに角僕は何か一つの道に徹底したいよ。差し當り僕はどうもその事を願はずにはをられない。自分が結局どの道にも徹底出來ない質なのでないかと云ふ氣がどうもしてな。」

裕佐は又おとなしくかう云つてかゝへた膝をゆすぶつた。

「ふむ、徹底すると云つたつて、こんな一文や二文のおもちや仕事に徹底したんぢやおぬしは滿足は出來なからう。もつとえらい仕事でなけれやな。——わたしの仕事なぞは貧乏人の子供相手の乞食仕事だ。之れで隨分丹精はして造る。こんな阿呆らしいやうな繪草紙一枚だつて見かけよりや骨を折つとるんだ。しかしいくら骨を折つたつて結句子供だましの夜鷹仕事だ。でもこんな

のらくらの遊び人の繪をとも角も一文や二文で買つてくれ手があるから不思議さな！　どうで雪舟も山樂も拜む事の出來ぬ看屋や八百屋の熊公八公がわたしの御上客だ。殿樣だ。それがわしには相應しとるて。ヘツヘツヘ。奴等にや又わしのやうな乞食繪師が相當しとるんだ。だからわしのやうな者もなけれやならんのさ。雲上人相手の白拍子ばかりぢや世の中は足らん。熊公八公相手の夜鷹もなけれやな。どうだ。君も徹底して夜鷹になるか。」

孫四郎はかう云つて煙脂だらけの黑い口をあいて笑つた。

裕佐が此版畫家に對して何よりも嫌に思ひ、それがために友に飢ゑてゐ乍らもさう繁〻と訪ねて深くつき合ふ氣にどうもなれなかつたのは實に此男の下等な僞惡趣味であつた。

人の心持ちを何でも下等に淺薄に解釋して獨り見拔いたやうな得意の薄笑ひを浮べ、人がそれに不快を感じて何かヘコマすやうな事を云ふと誰も呶鳴りもしないのに「まあさ、さう呶鳴らんでも」と云つて笑ふ。笑へば必ず故意の冷笑である。いかなる場合にも冷笑することが人生で最も優越な事であると思ふ事にしてゐるらしい此男は、人情として笑ふ事が必ず不可能である場合にも必ず意識してヘラヘラと笑ふ。何がそんなにをかしいのかと訊けば「何もかもをかしいのだ。自分自身も可笑しいのだ」と答へて又笑ふ。無論決して本當にをかしいのではない。只をかしがる事が好きなのである。をかしがつてゐたいのである。そして又をかしがり度いために凡て人生一般の對象物をその冷嘲の的となる下賤な階級迄引きずり降ろさずにはおかないのだから相

手が不快がるのは無理はない。そして相手が苛立てば苛立つほど彼はます〳〵その犬儒主義を享樂する上に滿足を感じて、相手が何でそんなに苛立つのか合點が行かぬやうな顔をして冷靜にかまへるのみである。それが彼の「勝利」なのだ。

併し、今彼のくだ〳〵しい毒舌を聞いた者は、彼の冷かな犬儒趣味が決して單なる彼の興味から出るものではない事を容易く見拔き得たであらう。表面氷の如く見える彼の自己冷嘲の奥には苛立たしい刺があり、ひねくれた者の弱い火があつた。その火は彼の裏切つて蒼ざめた頰をぽつと赭くしてゐた。

「しかしとに角君は畫家ですよ。僕は畫家ではない。」

「夜鷹」と云ふやうな言葉をつかふ孫四郎の興味に例の厭氣を催しながらもその上氣した顔を見ると何となく氣の毒なやうな氣がして、裕佐はかう云つた。

「低いなりにもな。ハ、ハ。わしは之丈けの繪商人さ。何と云つたつて。併しおぬしなぞは生れから云つてもわしなぞとは仕事の譯がちがはなけれやならん。それにまだ若いし——あせる事はないさ。些しも。」

何の親切氣もない調子でかう云ふと彼は長い立て膝を抱へ乍らその冷却した顔を又横に向けた。

「此間の又兵衛張りの人物畫はどうした。面白く行きさうだつたが。」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com